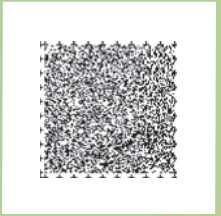




「ハートピアかごしま」での練習風景

ありが ヒューマン ドキュメント



メンバーの皆さんには、いつも教えられることばかりです。
なか はら

【中原 くるみ】さん 鹿児島市

卓球を通じた交流で 生き生きと

『ハートピアかごしま』で、毎週水曜日の午後6時から9時まで活動している卓球クラブがあります。その名も『水曜クラブ』（増吉二郎代表、会員約20人）。そこでは健常者と障害者が共に同じ球を打ち合い、卓球を楽しんでいます。

平成12年の発足以来、指導に当たっているのが、鹿児島市卓球連盟事務局の中原くるみさん。

水曜クラブ代表の方は、「障害を理解してくれた上で、実技を交えて指導してくれます。卓球が楽しくて仕方ありません」と笑顔で話します。メンバーの中には、卓球を始めてから会話が增えたり、外出する機会が増えてきた人もまた、『水曜クラブ』から全国障害者スポーツ大会に出場する選手もいます。

中原くるみさん



中原さんが障害者に初めて卓球の指導をしたのは、平成8年、鹿児島市勤労婦人センターの卓球講座に、障害を持つ女性が参加したのがきっかけでした。

「健常者だけの中で積極的に卓球に挑戦する彼女の姿に感激しました。同時に、彼女に障害はあるけれど、他にも動ける部分があることが分かってきました。だから彼女に『動けるのに、動かないのはもったいない!!』と言いつづけてきました。あとで彼女から『障害者の私にそんなことを言ったのは中原先生だけだった。でも、その言葉が励みになった』と言われたときのことは今でも忘れられません」と、中原さんは振り返ります。

動ける部分を少しでも 引き出したい

その女性との出会いを通して、鹿児島市心身障害者総合福祉センター（ゆうあい館）の卓球クラブ『土曜ナイトクラブ』にも参加するようになった中原さん。そんなとき、鹿児島県レディース卓球連盟からの紹介で、『水曜クラブ』の指導を始めました。

「肢体、聴覚、知的など障

害の種類は人によっても違うので、状態を知った上で「ユニケーションを取るよう」に心掛けています。まずは卓球を好きになってもらい、1球でも多くラリーが続けられるようにすること。その人のレベルに合わせて指導しながら、動ける部分を少しずつでも引き出したいと考えています。メンバーにはいつも教えられることばかりです」と中原さん。

現在、中原さんは『ハートピアかごしま』のほか、鹿児島市城西公民館で2つのクラブを指導。毎年1回、中原さんが教えるすべての生徒を対象にした卓球大会『中原教室たなばた会』を開催しています。「卓球は同じような打ち方でも球の回転が1球ごとに違つのが魅力。健常者、障害者の垣根を越え、卓球を通じてたくさんの方が交流してくれるのが、私の夢です」。



アドバイスにも熱がはいります



水曜クラブのみなさん



鹿児島県障害者自立交流センター

〒890-0021 鹿児島県鹿児島市小野1-1-1号 ハートピアかごしま3F

<http://www.heartpiakagoshima.jp/index.html>

mail:heartsyougai@heartpiakagoshima.jp

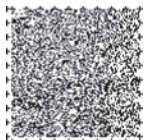
電話:099-218-4333

FAX:099-220-5420

開館時間:9:00~21:00 (グラウンドは9:00~17:00)

※施設使用料が必要(詳しくは問い合わせを)

休館日:火曜日、年末年始、その他臨時休館など



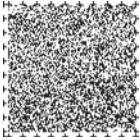
「もったいない」から
始まった黒豚の飼育

「お肉はどこからやってくる？」。帯に記された「ピー」が目をひく本がある。豚の誕生から成長、出荷、さらには加工品として製造されるまでを追った「ドキュメンタリー写真絵本『ぶたにく』（写真・文 大西暢夫、発行・幻冬舎エデュケーション）。その舞台となったのが、『ゆうかり学園』の豚舎だ。

ゆうかり学園は知的障害者の福祉施設として、昭和42年に開設。鹿児島市近郊の恵まれた自然環境の中で、牛や豚の畜産、果樹栽培のほか、木工などの活動も行っている。

『社会福祉法人 ゆうかり』理事長の水流洋さんは、「開設当時、施設で暮らす人々の残飯を捨てるのはもったいないと一匹の豚を飼ったのが、畜産を始めるきっかけとなりました」と当時を振り返る。昭和50年代に入り、黒豚の飼育を本格的にスタート。現在は肥育のほか、豚味噌や餃子の製造、ソーセージ

の加工・販売も手掛けしている。



『社会福祉法人 ゆうかり』ゆうかり学園

黒豚飼育を通じて写真家大西さんとの交流



『社会福祉法人 ゆうかり』理事長の水流洋さん



大西暢夫さん



『社会福祉法人 ゆうかり』
ゆうかり学園
〒891-1201
鹿児島市岡之原町1005
TEL 099-243-0535
FAX 099-243-0520
URL <http://yuukari-s.jp/>



小学館の受賞式に、大西さんの招待で、ゆうかり学園の利用者3名が参加



回収したパンの分別作業

豚の「命」のサイクルを
まとめた『ぶたにく』

職員は、豚を育てながら飼育や繁殖について学び、利用者も、豚舎の掃除や餌やりには汗を流しながら、豚をかわいがった。「豚と接することやわからない表情を見せたり、中には、豚の発情期などを見逃さず種付け交配するなど、職員より豚に詳しい人もいますよ」。

豚の飼料に、学園の残飯や学園の畑で栽培する野菜やサツマイモなどを使用。「できるだけ市販の飼料を使わないように心がけていますが、頭数が増えたため、それだけでは賅えません。近隣の小中学校や福祉施設の残飯、コンビニで残った弁当やパンなども飼料にしています」。さらに、豚舎の糞や糞を堆肥として畑に利用することで、低農薬で野菜を育てている。

ゆうかり学園の取り組みを知り、約3年の歳月をかけ豚に密着したのが、写真家で映画監督の大西暢夫さんだった。「豚目線の写真を撮るため、藁にまみれながら床を這って撮影していたのが印象的でした。大西さんの来園が励みとなり、みんなが笑顔で張り切って仕事をしました」。

豚たちの「命」のサイクルを、迫力ある写真と分かりやすい文章でまとめた『ぶたにく』は平成22年に出版、同年に第59回小学館児童出版文化賞、翌年には第58回産経児童出版文化賞を受賞した。「受賞は私たちにもいい刺激となりました。豚はもちろん、すべての食べ物をおいしく残さず食べることに。それが命をいただくことだと思います」。今日もゆうかり学園では豚と接しながら、命と向き合っている。

